

恋の話

## 繋がり

---

「俺、仕事やめたら、実家帰らなきゃじゃん？向こうで働き出したら、きっとこっちにはこれないだろうし...。

俺は今会えないことより、今無理をして体壊して、仕事をやめなきゃならなくなって、本当に会えなくなることのほうが辛い。」

そんなことを言われたら、どう反論して良いのかわからない。

無理をして、一緒に居ようとは、言えない。

そんな疲れきった顔でそんなことを言われたら、あたしはどうしようもないのに。

何もなくて良いから、そばに居させてほしい。それが何よりもあたしの望みなのに。

3日間。

なんの返事も無い人に、メールを送り続けるのは、少しつらいんだよ？

いつも返事が無いのに、「会えない」というときだけ、返信が早いのは、少し淋しいんだよ。

だって、返事できるんじゃない。って思うから。

どうして、休みの予定を立てようとしているメールにはなんにも返信が無いの？

短い返事で良いの。

一言で良いの。

仕事終わった一。疲れたから寝る。

...それでも、全然かまわないんだよ。

せめて、朝にでも、昨日は返信できなくてごめん。とか

仕事頑張ってくるよ。とか

それで良いのに。

たった一言で、あたしは救われるのに。

それは、そんなに難しいことなのかな？

毎日会えないことには別に不満は無いの。

仕事をしているんだから、いつも会えるとは限らないでしょ？

だから、そんなことでは怒ってないよ。

だけどね。

「部屋で一緒に居るのは飽きた」

あなたはそう言うけれど、あなたの恋愛の仕方は、部屋で一緒に過ごすからこそ成り立つ恋愛の仕方じゃないのかな？

一緒に過ごす時間があるからこそ、最低限のメールでやっていけるんだよ。

だけど、今のあたしとあなたの間には、一緒に過ごす時間は無いでしょ？

付き合ってから1ヶ月で何回2人で会った？

片手で、十分くらいじゃないかな？

あなたの仕事が終わってから。

...2時間とか。1時間とか。

そのくらいしか、逢ってないよ。

逢えるのはいつも10時とか11時で。

それでも、いつも終電とかそのすぐ後に家に送り返されるね。

「逢ってるこの時間でも、俺の睡眠時間は削られてるんだけど」

それは...真実かもしれないけれど、言われたらしんどいよ。

そんなこと...言われても苦しいだけ。

あたしだって待ってるのに。

あなたが仕事終わるの、3時間とか4時間とか...待ってるんだよ？

それで...メールが来ることは無くて。

電話がかかってくることも無くて。

部屋に行っても良い？

あなたの答えは、その短い言葉は、あたしの中に抜けることの無いとげみたいに刺さってるよ。

「ダメ」

ただそれだけ。

ただ突き放すように、なんの感情も無く言い放たれるその言葉は、あたしにとってはただの武器でしかなくて。

どうしてもそばに居てほしい日であってもその返事は変わらない。

それどころか「俺以外に一緒にいる友達とかいないの？」そんなオマケまでつけられて。

あたしはほかならぬあなたにそばに居てほしいのに。

抱きしめてと頼めるのはあなたしか居ないのに。

思い出すだけで、苦しくなるような言葉ばかり、思い浮かぶのはどうして？

あなたは自分のわがままは通すけど、私のわがままはいつも先回りして言えなくしてしまうね。

身体のつながりがほしいわけじゃないよ。

そりゃあ、それがあれば、それなりに得られる幸せがあると思うから、嬉しいのだけど。

最後に抱かれたのがあなただと思うことで、この不安も少し経るかもしれないけれど。

...だって、

最後に抱かれたのは、あなたでありたい。

そう願うのは...自然なことじゃないのかな。

## 赤い星

---

ああ、火星が出てる。

そう思ったのは、多分会社の同期と飲んだ後だった。

一緒にいたのが、同期の男の子だったから。

家の近くの駅からの帰り道。

街よりずっと灯りが少ない住宅地。

東の空が良く見える、東に向かった上り坂。

あまり高くない東の空に煌々と輝く、赤い星があった。

明るく瞬かない赤い星。

ああ、火星だ。

そう思ったのだ。

今年もアンタレス見れなかったという思いと、星空が見えることに夏の終わりを感じたのを今でも覚えてる。

時間は今日と同じくらいだったと思う。

同期と飲むときは、そんなに遅くならないから。

それなのに、今日見上げた火星はずいぶんと高く南の空近くに輝いていた。

見上げて顔を上げた自分の息が白くて。

東の空にオリオン座が見えて。

もう冬になるんだ。

そう思った。

空を見上げて歩くことが、最近多くなった気がする。

元々星は好きだし、空を見てれば飽きない方だけど。

でも、最近の星空は、雲って見えないことが多い。

曇っているのは、空ではなくて。

あたしの瞳。

だって、仕方がないじゃない。

そうしないと情けないくらいに涙が溢れてくる。

アパートの階段を上る頃には、もう駆け足で。

鞆の中の鍵を手探りで探して。

何かにおわれるかのように部屋に逃げ込んで鍵をかけて。

...その場にしゃがみ込んで泣いた。

あなたに会うときは、いつでも笑顔で居たいよ。

あなたがまた会いたいと思ってくれるように。

あなたと会えるかもしれない日は、綺麗な私で居たいよ。

あなたにとって、私が魅力的であるように。

あなたに送るメールではいつも元気で居たいよ。

仕事で疲れているあなたを、元気付けてあげられるように。

でもね。

ギシギシと心が悲鳴をあげるの。

あなたと会えるのは、月に一度か二度で、長くても3・4時間。

会ってる時間がどんなに幸せだったとしても。

31日ないし30日間の一ヶ月のほんのわずかな時間に過ぎなくて。

会わない時間には、あなたからはメールも電話も無いね。

どんなにメールをしても、帰ってくるのはごくごくたまにで。

あなたは「メール見て元気もらってるよ」といつてくれるけど。

でも、あなたは私に元気も幸せもくれないの。

もう、私には、あなたに分けてあげれる元気が残っていないよ。

私のできることは何一つ無いのかもしれないけれど。

あなたの傍に居たいと思ってるんだよ。

私は、たくさん話す取っ掛かりを探しているのだけど。

あなたが私の話を聞く余裕がある日を必死で探しているのだけど。

会いたい、あつて話したい。

家に着いたら電話頂戴？

どんなに言っても、会えることも電話が来ることもなくて。

ただ一言のメールすらなくて。

私の言葉が本当にあなたに届いているのか、いないのかすらわからないの。

あなたは、「何かあったら、そばに居るよ」というけれど。

ふたりの事すら話せないのに、私はあなたに何を話したら良い？

あなたの傍に居れないことが何よりも苦しい私の傍に、居ようともしないあなたのその言葉を信じることは出来ないよ。

きっと出ない。きっと返事は返ってこない。

そう思うと怖くて電話もメールも出来なくなってしまったよ。

限界になって半ばヒステリックに泣き叫ばないと、あなたは自分が何を考えているのかも、なにも話してはくれないね。

「大丈夫だよ」

あなたはそういうけれど。

全然大丈夫なんかじゃないよ。

だって、このままじゃ私の心が壊れちゃう。

あなたに伝えたい言葉はたくさんあるの。

あなたに言いたい気持ちもたくさんあるの。

だけど、怖い。

怖くて、あなたの番号が表示されたまま携帯を握り締めてるよ。

きっと今日も、かけたってあなたは出ない。

そう言い聞かせてる。

だけど、心のどこかで今日は出てくれるんじゃないかって思ってる。